

## 29E-am01

甘草（カンゾウ、*Glycyrrhiza uralensis*）の高品質系統の育成研究：リクイリチン含有率の個体間変異について

○高上馬 希重<sup>1</sup>、林 茂樹<sup>2</sup>、柴田 敏郎<sup>2</sup>、山本 豊<sup>3</sup>、関崎 春雄<sup>1</sup>（<sup>1</sup>北医療大薬、<sup>2</sup>医薬基盤研・薬用植物資源研セ、<sup>3</sup>栃本天海堂）

【目的】マメ科多年生草本カンゾウ（*Glycyrrhiza uralensis*）の根およびストロンは生薬「甘草（カンゾウ）」として多くの漢方処方や医薬品原料に利用され、抗炎症、抗潰瘍、肝機能強化などの作用を有する。甘草の生産は国外での野生品採取や粗放的農業栽培に依存しているが、資源枯渇などにより供給量や品質の低下が憂慮される。高品質な甘草の安定生産のために有望品種の開発が必要とされている。我々はこれまでに、カンゾウ植物体の個体間ごとにグリチルリチン（グリチルリチン酸、以下 GL）含有率に大きな変異が存在することを明らかにし、高グリチルリチン系統の選抜を行っている。<sup>1)</sup> 一方、高品質な甘草の生産には GL 以外の化学物質についても評価する必要がある。そこでリクイリチン（以下 LQ）含有率の個体ごとの多様性を明らかにするため本研究を行った。

【方法・結果】*G. uralensis*の種子を圃場に播種し、同一環境条件で栽培した。栽培5年目に100個体を圃場から掘りあげ分析材料とした。主根の乾燥試料をHPLCによりLQ定量分析を行った。

【結果・考察】100個体の各LQ含有率には大きな個体間変異が認められた。最大値2.65%、最低値0.11%であり、両者のLQ含有率の差は24.1倍であった。平均LQ含有率は $1.00 \pm 0.49\%$ であった。またLQ含有率とGL含有率には正の相関が認められた。

1) 日本薬学会第130年会要旨集2P-pm135 (2010)